依存症から回復したい人と それを支援したい人をつなぐ、課題共有型円卓会議「えんたく」実践のためのガイドライン

JST 社会技術研究開発センター（RISTEX）「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」研究開発領域採択プロジェクト「多様化する嗜癖・嗜虐行動からの回復を支援するネットワーク（ATA-net）の構築」

研究代表者・石塚伸一（龍谷大学）

“えんたく” のめざすもの

アディクション（嗜癖・嗜虐行動）からの回復には、当事者の主体性を尊重し、その当事者の回復を支えうるさまざまな状況にある人々が集まり、課題を共有し、解決に繋げるための、ゆるやかなネットワークを構築していく話し合いの場が必要です。わたしたちは、この「課題共有型円卓会議」を “えんたく” と名づけ※、さまざまなアディクション回復支援に役立てることをめざしています。

※“ えんたく ” は、特定非営利活動法人みらいファンド沖縄の『沖縄式地域円卓会議』から多くの示唆をえています。

このガイドラインの役割

このガイドラインは、“えんたく”C を中心に考えかたと進めかたを解説し、さまざまな場で実践にいかしてもらうた目のものです。

“えんたく” の今後の改良に生かすため、このガイドラインを使って円卓会議を実践した場合には、ぜひご連絡ください。また、質問などがあればお気軽にお寄せください。“えんたく” の開催支援もわたしたち ATA-net のミッションです。ご連絡は、下記 ATA-Net ホームページまたは最終ページの連絡先へお気軽にお寄せください。

ATA-net ホームページ
https://ata-net.jp

どのような場面で、どのような人が “えんたく” を企画・実施すればいい？

“えんたく” は、依存という「病」に悩み「困っている人」と課題を共有し、当事者の主体性を尊重しながら、課題を共有し、当事者に寄りそい、回復を支える人たちをつなぎ、当事者の回復する力をエンパワーメントすることを願う人たちのためのものです。

“えんたく” には３つの基本形があります。

①えんたくＡ（Addict）

当事者どうしがたがいの思いや現状・経験を率直にかたる場です。

②えんたくＢ（Bond）

特定の当事者と回復支援に深くかかわる人たち、すなわち、家族、知人、専門家、支援者（これからなろうとする人も含みます。）で語りあい、当事者のかかえる課題を共有する場です。

③えんたくＣ（Collaboration）

多様なアディクション（嗜癖・嗜虐行動）にかかわる人たちが集まって，国や地方公共団体、地域社会のアディクションにまつわる課題を共有し、対策を考える場です。

では、“えんたく” の概要や進行を知りたい人は次ページへ、
①～③の場の機能を知りたい人は最終ページへどうぞ。

「えんたく」の企画と進めかた

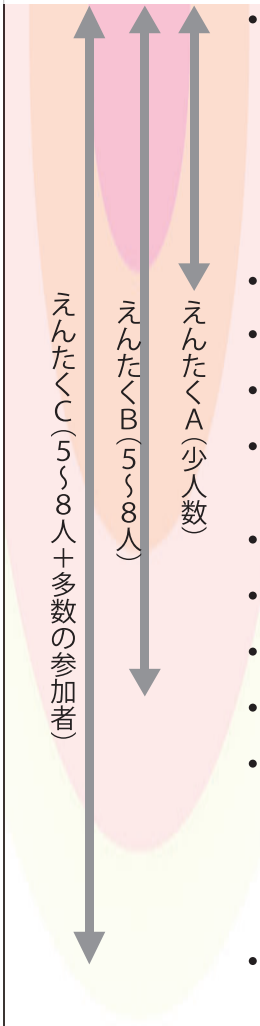
“えんたく”の目的はなんですか？

3つの“えんたく”には、それぞれ目的があります。

簡単にまとめると、えんたくAは、当事者自身の内面を支えるためのもの。えんたくBは、当事者を支えるつながりをひきだすためのもの。えんたくCは多くのひとに理解や共感をひろげるためのものです。

あなたが必要としているのは、どの「えんたく」ですか？

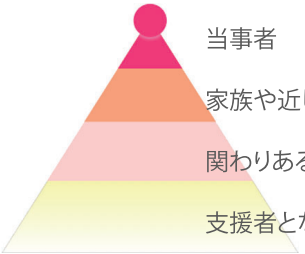
“えんたく”のメンバー構成を考えよう



- 当事者
  えんたくAとBでは、当事者の存在や発言が不可欠です。主体は、当事者本人だからです。ただし、えんたくCでは、当事者に代わって発言できる人、たとえば当事者グループの代表など支援者でも可能です。
- その人を支援している団体関係者
- 家族
- 知人・隣人
- 当事者の生活基盤形成にかんする情報をもつ人
- 福祉、医療、司法その他の実務家
- 自治体その他の行政職員
- 大学教員その他の研究者
- 実務家・研究者などの専門家
- メディア関係者

公的な立場にある人が発話しやすくなるため、また課題の共有を進めるため、同僚など同伴者との参加をおすすめしましょう。

- えんたく着席者以外の、その課題に関心をもつ多様な市民



“えんたくC”の進行をみてみよう

“えんたく”は、前半と後半、その間にあるシェアタイムで構成されます。

前半	シェアタイム	後半
当事者の問題提起と登壇者の「事実」を語り重ねて、課題を立体的に把握する。	参加者が３人１組で話し合い、課題を主体的にとしてとらえる。	課題について議論を深め、課題の共有と支援のつながりを目指す。

・前半（一時間強）

前半は、情報共有のフェーズです。

まず、当事者（またはその代弁者）から、当事者がいま抱える問題を「話題提供」します。

登壇者はその話題にかんする事実（データ、経験など）を提供します。この時、解説や主張はしません。また、根拠のない噂や風評もNGです。これらは参加者に共有される情報であり、この情報が質量ともに濃密に提供されることが前半のポイントです。そのため、司会は、ときに登壇者の発話を止めることもあります。

・シェアタイム（20 分程度）

登壇者を含む参加者（観覧者）が3人一組になり、前半をふまえ自由に語ります。

この時間は「主体的な課題共有」にとって非常に重要です。えんたくCの最重要ポイントといってよいでしょう。

3人1組というサイズは重要です。短い時間でも自己紹介や意見交換ができるからです。

“えんたく”の概要

４名になると語らない（語れない）人が出ることがあり、２名では声の大きい人が長く語ることになりがちです。このため、３人を基本としています。ただ、参加者の人数によってどうしても3にならない場合は、４人組のグループがあっていいでしょう。２名組を作るより、４人組を複数作るほうがいいでしょう。

話し合うテーマは、「いちばん大事だと思ったこと」あるいはより具体的にテーマとつなげ「どうしたらよいと思うか」などがよいでしょう。参加者に前半の内容がよく理解されている場合は前者、関係者が多く深いより具体的な議論ができそうな場合は後者をおすすめします。

自己紹介からはじめ、話し合った結果はひとことや一文にまとめて、A３やB４の大きな用紙にマジックで書いてもらい、壁などに貼って参加者で共有します。

- 後半（小一時間）

前半をふまえて、登壇者が議論します。

時間に余裕があれば、シェアタイムの話し合いの結果をいくつか共有しても良いでしょう。

後半は、筋書きのない話し合いです。前半で蓄積された事実によって、ステークホルダーたちも自分だけでは気付いてなかった問題の様相や本質が共有されているはずです。それについていま考えていることを語ってもらいます。

終盤には、この“えんたく”で共有できたこと、発見したことをまとめます。登壇者の発話を促しても良いですし、司会がまとめても良いでしょう。

- アフター“えんたく”シェア

“えんたく”終了後は、登壇者と参加者の交流の機会を用意します。

できるだけ参加しやすいように、会場にそのままお菓子やお茶を用意して開催し、名刺交換の時間や感想を言い合う時間を作るのもよいでしょう。

課題共有が連携の醸成や実践につながる「プチミラクル（ちいさな奇跡）」は、こうした話し合いから生まれます。

課題共有から一歩ふみこんで、課題解決をめざす“えんたく”の場合には、ここから、テーマをより絞り込んだ“えんたく”の開催を設計します。

えんたくC はなぜ課題共有に効くの？

えんたくＣで課題共有を進めるために、以下の点が実現するようにしましょう。

- 当事者の主体性を基盤とし、これを尊重すること
- 前半では、風評や噂ではなく、データや経験などの「事実」の情報が共有されること、そして、その裏打ちができる登壇者がいること
- 参加者（観覧者）がみずからの考えることを語り合う時間を用意すること
- 登壇者が孤立せず、思うことを話せる場にすること
- 登壇者と参加者の交流の機会とすること

当事者の気持ちや悩みを聞き、登壇者がもつ情報が共有され、それについて自分と周囲とで考え語る空間と時間が、その課題を「自分に関わりのあること」=「自分ごと」として引き寄せるのが、えんたくCのチカラなのです。

回復を支える「話し合い」の場

回復と話し合い

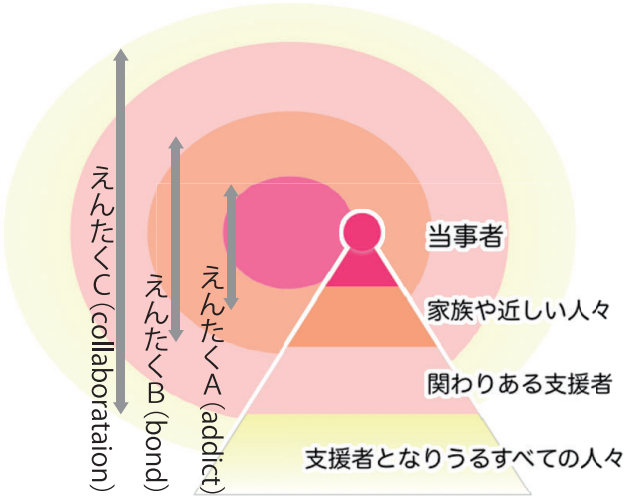
依存症からの回復は、困難がともなう長い過程です。そのためには、当事者の「回復したい」という気持ちを核心においた、その回復を支援するつながりが必要です。わたしたちは多様な実践をつうじて、その「つながり」の醸成には、大きく分けて３種類の話し合いが必要で重要だと気がつきました。この、３つの“えんたく”の場が持つ役割をあらためて考えてみましょう。

回復のための「話し合い」の場が持つ役割と課題

〔アディクト（Addict）〕

～当事者による分かち合いの場～

回復のための当事者の内面を、当事者みずからが支えるための分かち合いの場です。当事者が安心して語れる場であり、なにを話しても、否定されたり、非難されることなく、仲間に受け容れられ、共感し、共に分かち合うために、少人数のクローズ（閉ざされた場）であることが必要です。



〔つながり（Bond）〕

～当事者とその回復を支える人たちのつながりの場～

当事者の家族、当事者の課題に直接かかわりをもつ支援者（これから支援者になろうと思っている人も含みます。）が、課題を共有し、それぞれが主体性をもち、それぞれの立場から、当事者の回復を支える関係性を構築する話し合いの場です。現在は、専門領域ごと、あるいは、回復支援者が相互に分断され、それぞれの殻に閉じこもって、当事者の回復を阻害するような局面がまま見られます。

このような状況を克服するためには、多様な支援者のゆるやかなネットワークが必要です。

〔協働（Collaboration）〕

～当事者の課題を社会の課題として共有する場～

依存と回復にたいする理解と共感、それを基盤とした支援したいという欲求（「ほっておけない気持ち」）を醸成するための話し合いの場です。現状では、アディクション（嗜癖・嗜虐行動）の問題は、当事者とその家族の自己責任（身内の問題）と刑事責任（処罰の問題）として処理されています。ですが、アディクション（嗜癖・嗜虐行動）は、人間として悩みや弱みをもつわたしたちや、わたしたちの大切なだれかもなりえることなのです。

そして、その回復には、多様な連携が欠かせません。わたしたちの社会全体でとらえることで、その課題と対策が見えてくるでしょう。

ATA-net ではこうしたえんたくの開催支援、思考と実践、情報提供をおこなっています。ご相談、ご連絡はお気軽に下記の連絡先へお寄せください。また、ホームページもぜひご覧ください。

〔お問い合せは、下記連絡先またはHPへ〕

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
龍谷大学深草キャンパス　ATA-net研究センター
電話：075-645-2154　　FAX：075-645-2240
メール：info@ata-net.jp

ATA-net ホームページ
https://ata-net.jp